

台湾出兵の根拠となった日本政府顧問ル・ジヤンドルの幕末・明治初年の台湾の実情報告書。原題は「李氏台湾紀行」。

ル・ジヤンドル

台湾紀行

全4巻

我部政男・栗原純編

緑蔭書房刊

編纂にあたって

我部政男

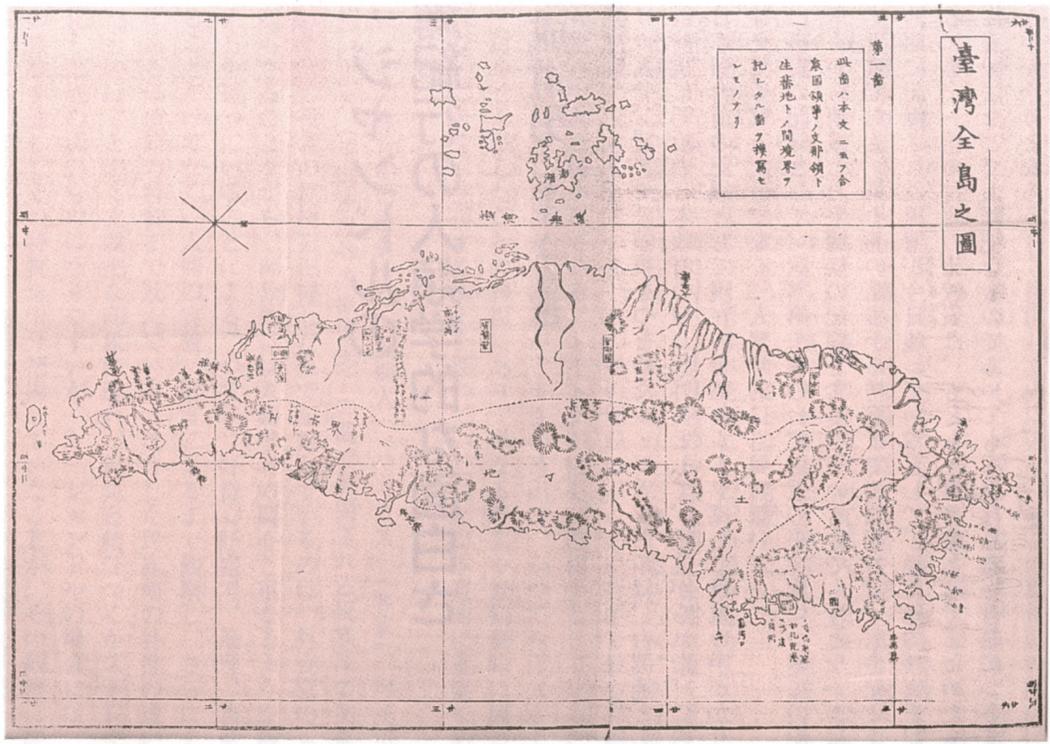
本書『ル・ジャンドル台湾紀行』（原題『李氏台湾紀行』）は、『Notes of Travel in Formosa』と題して一八七四（明治七）年にル・ジャンドルが書いたものを太政官正院で翻訳・編修したものである。

近代日本の最初の対外侵略となった台湾出兵に重要な役割を演じたのは、米国廈門領事から日本政府顧問となったル・ジャンドルその人であり、台湾に関する有益な大量の情報を日本政府に提供した。一八七二年、台湾問題に関する意見を述べた覚書も彼の豊富な台湾についての知識や体験にささえられたものであった。厦門領事時代、一八六七年の台湾における米船ローヴァー号事件の処理に米人遠征隊を組織したのをはじめとして七二年まで数度にわたり台湾を巡回し見聞を深めた。

本資料は日本統治以前期の台湾を知る貴重な記録であり、近代日本の植民地支配・台湾認識の形成に大きな影響を与えた記念碑的資料でもある。その内容は多岐にわたる。オランダ統治期の記録、清国の台湾統治の実情、ローヴァー号事件の経緯等を収録。台湾の自然と社会の観察・分析は直接の体験を映して大変興味深い内容となっている。とくに台湾原住民族の記録は人類学的にも貴重なものである。

本資料は原本、訳本とも国立公文書館にしかないもので、今回、全冊復刻刊行にあたって訳本（和綴本、縦26・5センチ×横19センチ）を四六判に縮小し、合本にあたっては原本英文目次を参照した。今後の台湾研究に広く活用されることを期待します。

ル・ジャンドルが境界を記した地図。日本の台湾出兵正当化の根拠となった。(出典：ル・ジャンドル『蕃地所屬論』の付図より)



ル・ジャンドル
(Charles W. Le Gendre, 李仙得) 略歴

一八三〇年八月、フランスに生れる。
その後アメリカに帰化する。
南北戦争退役(少将)後、
一八六六年より
中国廈門の米國領事。
六七年米船ローヴァー号が台湾で破船した事件に関し、
米人遠征隊を組織し処理にあたる。
以後七二年にかけて数度台湾を巡回。
七二年(明治五年)米駐日公使デ・ロングにより、
台湾問題のエキスパートとして紹介され、
のちに外務顧問となる。
七四年(明治七年)の台湾出兵に関しては
種々の献策・進言を行ない、重要な役割を果たす。
滞在中、松平藩の池田いと子と結婚。
九〇年(明治三三年)韓国政府顧問となり、
九九年(明治三二年)九月ソウルで病死。六九歳。
著書に『蕃地所屬論』『日本文明論』等がある。

ル・ジャンドルの「日本文明論」

すいせん

ル・ジャンドルの 台湾紀行の人類学的面白さ

末成道男 (東洋大学教授)

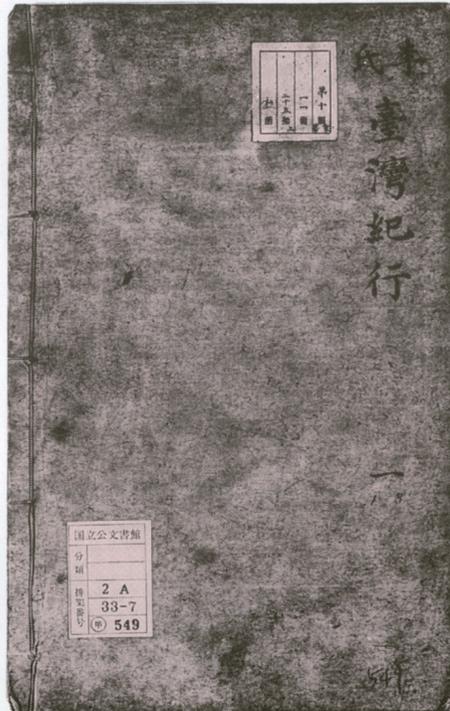
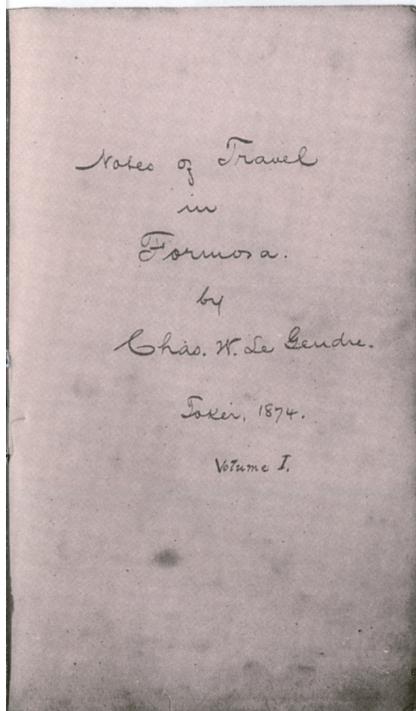
アメリカ人で、前アモイ領事をつとめたル・ジャンドルは、台湾通として、領台前後に明治の日本政府の雇われ外人として、重宝がられた。この紀行は日本領台前の記録として現在の台湾のルーツ探しに貴重な手がかりを多く与えてくれるだけでなく、人類学的にも興味深い。

先ず、事実の記録として、訳本第一巻の台北付近の平埔族についての記載は、早くから消滅した平埔族の記録を含み、短いものでも今となってはきわめて貴重である。第七巻の高雄から枋寮までの旅行で、一七世紀オランダ統治期に記録された風習が今日残っていると、民族誌的事実を記している。第十一巻の言語の比較表は、もともと実務家としてまとめたものだけに表記法などで大雑把なものであっても、現存しない言語については貴重な手がかりとなる。

第二に、原住民との接し方に人類学者のそれと重なるところがある。かれの好奇心は、当時首刈りの行われていた山地原住民の村へ平地の役人たちの制止を振り切って自ら入り込んでいるところにも表れている。かれが、たびたびこうした行動を試みながら、無事であったのは、幸運であったことであろうが、外交官として整った犬兄の判断力、相手の裏こぼれ

近代日本の植民地支配・
台湾認識の形成に大きな影響を
与えた記念碑的資料。

原本(英文)の表紙

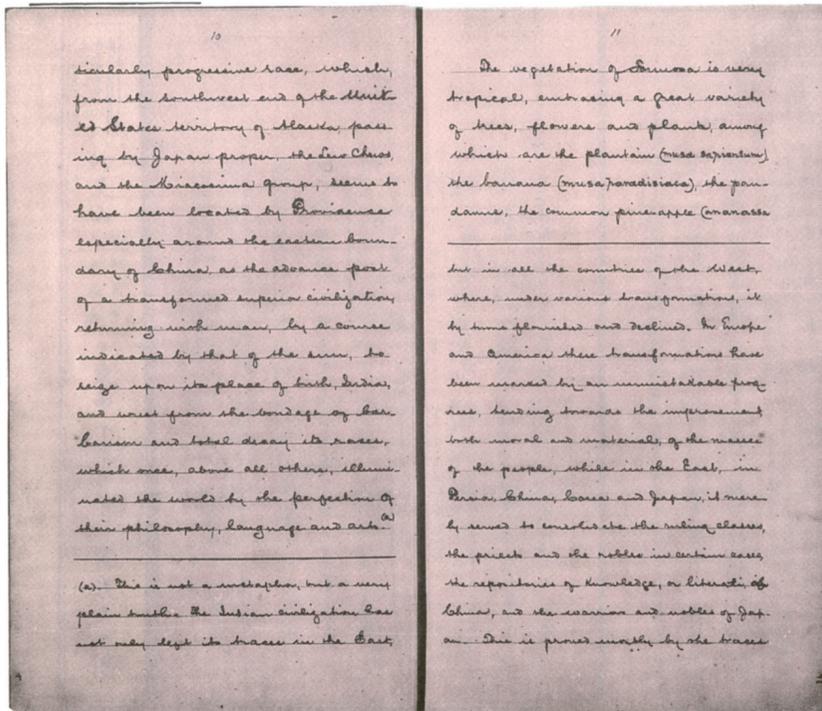


込めばそこには秩序をもった世界があるという人間的な信頼感に裏付けられていよう。第六巻では、前に知り合った神父が他界して、後任のスペイン人神父と衝突し、神父が噂を流したり、山中へ入る希望を、役人が許さないと称して妨害するのを、名刺を出して役人を呼びつけ福建省総督より貰った通行証を示し、自ら指図して山に入り、その原住民の部落に泊まり込んでいる。ここでの記録は他にくらべ詳しく臨場感がある。間取り、家族が六・七十軒で六人から十二・三人、衣服、粟を積んでネズミの害を防ぐような積み方、入れ墨、幼女が宿舎の近くで日没から日の出まで踊ること、戦争の捕虜の周りを踊りながら殺す風習の話を書いて、夜火を焚いて、取りまいて演じたこと、土蕃(原住民)が支那人(漢族)に恨みを抱いていて、ジャンドルのような種の人(原住民と連合して、駆逐する意思があるかどうかを確かめようとしたことなどを記している。

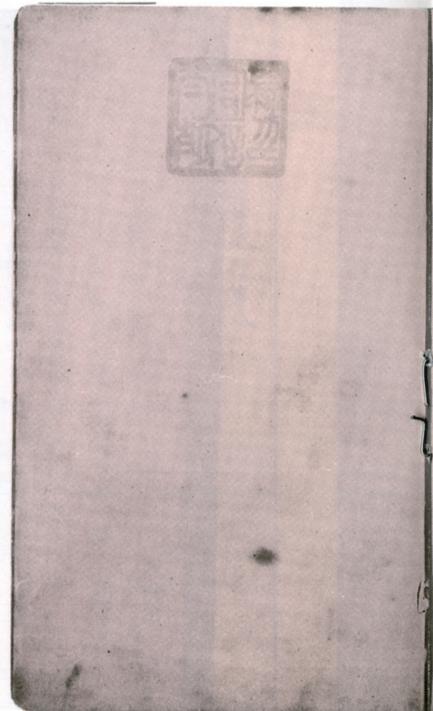
同様、第九巻では、ローヴァー号事件を起こした、台湾南端近くのパイワン族の牡丹社首長トキトクに対し、数百名の中国人兵士を連れ近くまで行くが、会見には丸腰で通訳ら二・三人を連れただけで乗り込み、単刀直入に善後措置の交渉をしている。この時の記録は、この紀行中で最も詳細で状況も生き生きと描かれている。トキトクが彼を交渉相手として認めたのは、その胆力に感じたこともあるが、事件の遠因は、かつて西洋人が上陸して一村をせん滅したことの報復にあり、単なる野蛮や無知蒙昧に因るものではないことを、感得する構えを持っていたことが本質的に重要であると思われる。

第三に、その旅行中に出会った「支那人」「ハツカス」(客家)、パイボ(平埔族)、土人(平埔族以外の原住民)の間で展開される民族間の関係を、それぞれの役者の性格を把握した上で記録しているのは、外交官のもつ観察眼もさることながら、部分的には人類学者の関心と重なるような観方や考え方を持っていることによる。つまり、好奇心旺盛で、地理、物産に関することだけでなく、人間の容貌、態度に至るまで観察し、さらにその背後にある価値観の特質まで及んでいる。こうした民族間の特性の違いといったものは、とかく大雑把な印象に流れ、偏見と結びつくカステレオタイプ化した底の浅いものになりやすいが、ル・ジャンドルの場合には、漢族との接触を通してその特質を十分把握していたことが、その観察に説得力を与えている。

原本の本文見本



原本の本扉



いろいろな意味でももしろい資料

松永正義 (一橋大学教授)

おもしろい資料が出てきたものだ。なにがおもしろいかというと……

一八七四(明治七)年の台湾出兵は、近代日本最初の海外派兵で、後の台湾領有に至る台湾イメージを形成した大きな出来事だが、時の日本首脳部が出兵を決断したのは、ル・ジャンドルの台湾に関する情報と考え方が大きな要因になっていた。そしてル・ジャンドルの情報と考え方の基礎にあったのが、この資料にあるローバー号事件をめぐるいきさつだったのだ。だからこの資料におけるル・ジャンドルの体験が、近代日本の台湾イメージを形成した重要な源泉のひとつだったと言っていることがひとつ。

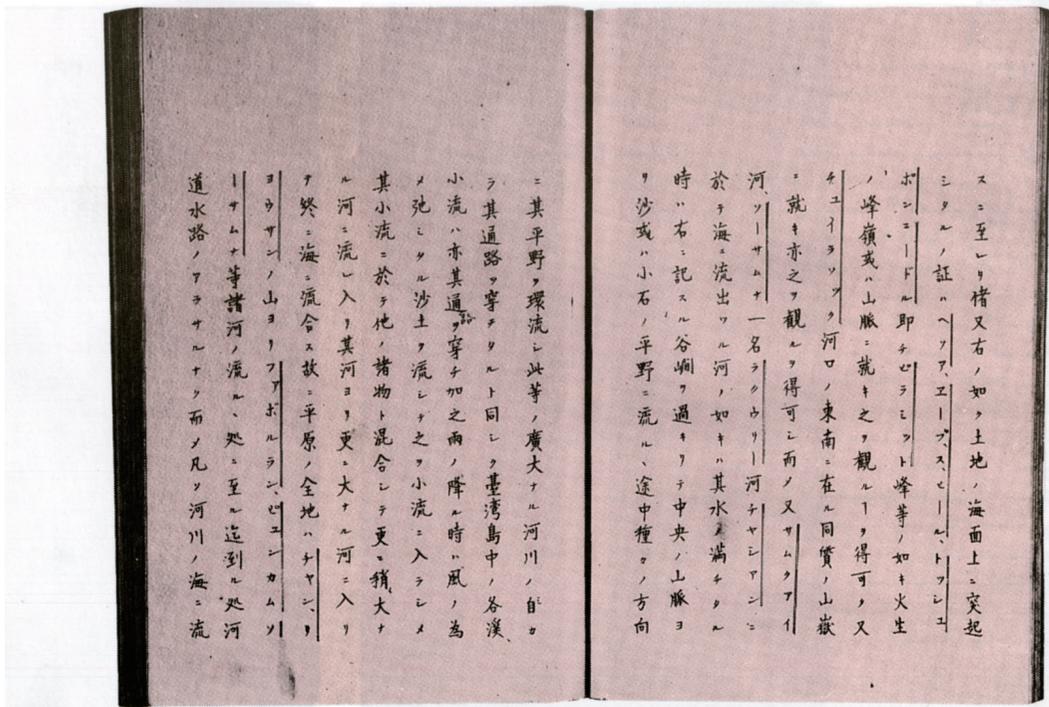
またローバー号事件そのものが、中国が近代国家に国境を持つ国家へと脱皮していくときの諸問題を、象徴的に示す事件だったということもある。これはもつと追求されていいテーマだろう。

ル・ジャンドル自身もおもしろい人だ。フランス生まれで米国女性と結婚してアメリカに帰化、南北戦争で負傷して少将で退役、厦門領事となりローバー号事件を処理。自己の経綸を日本を通じて実現せんとして日本の顧問となり、日本女性と結婚(声楽家の関屋敏子はその孫)、後日本を通じて韓国政府の外務顧問となったが、最後は不遇のうちにソウルで客死した。ローバー号事件はその波乱にみちた生涯のハイライトと言っているだろう。

さらにまたこの時期の台湾の様子を記したものが案外に少ないと言うこともある。台湾の地方官吏の対応の様子や原住民族の様子など、それぞれに興味を引く。

ちよつと考えただけでもこれだけさまざまな方面から興味を引く資料が、手軽に読めるようになるのはうれしいことだ。

原本(訳本)の本文見本



スニ至レリ情又右ノ如ク土地ノ海面上ニ突起
シタルノ証ハヘノア、エーゾ、ス、ビー、トツレ
ホニエーデル即チピラニト峰等ノ如キ火生
ノ峰嶺或ハ山脈ニ就キ之ヲ觀ルルヲ得可ク又
チユイタツク河ノ東南ニ在ル同質ノ山嶽
ニ就キ亦之ヲ觀ルルヲ得可ク而ノ又サムクア
河ソイヤムナ一名ヲクムリ河チヤニアニ
於チ海ニ流出ツル河ノ如キハ其水ニ満チタル
時ハ右ニ記スル谷嶺ヲ過キテ中央ノ山脈ヨ
リ沙或ハ小石ノ平野ニ流ル、途中種々ノ方向

ニ其平野ヲ環流シ此等ノ廣大ナル河川ノ自
ラ其通路ヲ穿テタルト同レク臺灣島中ノ各溪
小流ハ亦其通ヲ穿テ加之兩ノ降ル時ハ風ノ為
メ弛ミタル沙土ヲ流レテ之ヲ小流ニ入ラシメ
其小流ニ於テ他ノ諸物ト混合シテ更ニ積大ナ
ル河ニ流レ入り其河ヨリ更ニ大ナル河ニ入り
テ終ニ海ニ流合ス故ニ平原ノ全地ハチヤニリ
ヨウサンノ山ヨリフアボルラン、ビユンカム川
イヤムナ等諸河ノ流ル、地ニ至ル迄到ル河
道水路ノアヲナルナク而ノ凡ソ河川ノ海ニ流

本書の構成と内容

第一卷 〔訳本〕第一卷―第三卷

第一回 想起総論

第二回 ケリユン港（基隆）及其近地

第三回 ケルン（基隆）ヨリタムシ（淡水）迄ノ噴泉巡見

第四回 陸路ヲ過リテ鷓鴣（基隆）ヨリ淡水ニ至ル途中

第五回 境界塔紀行

第六回 クーコウノ旅行

第七回 淡水ヨリタイカニ至ル途中

第二卷 〔訳本〕第四卷―第六卷

第八回 北ヨリ南ニルウ、キアン、チンヲ過ケル途中ノ記

第九回 タイハンチン、台湾府、アンピン

第十回 ライフン。ソーサムナ及ヒラクウリノ両谷。トーシア及ヒタカラ以東ノ地

第三卷 〔訳本〕第七卷―第十卷

第十一回 タカラ（高雄）ヨリボンリ（枋寮）マデノ地帯ノ事、付タリオランダ人占拠ノ時代ノ土蕃ノ風俗今日ニ至テ猶存スルノ詳説

第十二回 タイファン庁ノ幅員并ニ人口ノ事

第十三回 草木、花、動物等ノ支那領ノ台湾ニアリ……

第十四回 オランダ人ノ支那人ノタメニ放逐セラレタル後台湾島ノ景況付…四百年ニ於ケル山中土蕃ノ詳説并ニオランダノ支配ト支那ノ支配ト比較ノ事

第十五回 ホンリ（枋寮）ヨリコワリアン湾（台南湾）マデノ地方。ローウアー

第十六回 南部台湾ノ鎮静ニ関シ余支那政府ト商議ヲ盡セン顛末

第十七回

ローウアー船長ハント氏夫婦ノ遺骸探索トシテピッケリン氏并ニホルン氏ノ兩名南部台湾ニ行キ勇壯ノ挙動ヲナセシコト

第十八回

ピッケリン氏并ニホルン氏ノ兩名ホンリヨリ到着ノ後処置セシ始末

第十九回

予力劉將軍及ヒ其軍卒ト共ニチャシヤン（車城）ニ赴カント約セシ話及ヒ其進行ニ付キ起リシ事件

第二十回

トキトクトノ結約及ヒ支那軍隊ノ引揚ケ

第二十一回

リヤンキヤウ湾（獅橋湾）ニテ採拾シタル石類并貝殻ノ目次

第二十二回

千八百六十八年及ヒ千八百六十九年台湾南部ノ蕃地ニ至ル紀事。千八百六十七年十月取結ヒタル約款千八百六十九年ニ於テ批准セラレシ事。支那ノ権理ノ台湾蕃地ニ及ホス策

第二十三回

千八百六十九年九月クワリヤン湾ニ於テバシー島人難船ノ事并同年冬日台湾東南ノ隅角ニ於テホルン氏破船ノ事

第二十四回

英船「ロンチユン、カッスル」号難破ノ事并ニ牡丹社東南ノ界ニ於テ日本琉球藩人五十八名殺害ニ達フ事。

第二十五回

予一千八百七十一年米船「アシユロツト」号事件ノ地ニ赴キトキトクニ対面ノ事

第二十六回

日本ニテ台湾蕃地所有ノ権ヲ執ルノ理アリヤ否

第二十七回

クワアリアン湾ヨリ鷓鴣（基隆）ニ至ルノ海岸

第二十八回

千七百年間及ヒ千八百年間印行シタル和蘭人ノ地図ノ明細記コントデヘニヨスキ氏ノ事件

第二十九回

台湾蕃人ノ土語

本書の本文見本（見開き）

李台湾紀行第八

第十五回

ホンリヨリコワリアン湾マデノ地方〇ロ

イウアー船ノ船影屠戮〇英米ノ兩軍南即

台湾ノ生蕃懲責

チヤウトン

ホンリヲ距ル凡四里之ニ做フニシテサカサカ

ト稱スル支那人ト熟蕃雜居ノ小市井アリ人口

大約五六百ニシテホンリノ市人同様ノ家業ヲ

営ム其街市タルヤ竹ト泥トラ以テ造築スル小屋ノ集團ニシテ一小河ノ口岸ニアルカ故ニ降

雨ノ時ハ澳艇ノ風波ヲ避ケ輻湊スルヲアリテ

深遠タル一ノ港灣トナル其陸地ハセントラリ

ル山脈ノ支山逶迤環繞シテ海面ニ綿亘シ其形

恰モ馬脊ニ彷彿タリ故ニ此地ヨリ東北東南ノ

地方ニ往還スル者ハ此支山ヲ越ヘザルヲ得ス

而シテ支山ノ土性ハクローコイ又ハクオシアニ

於テ見タルト同種ノ水濱石質ナリ此地方ハハ

バン種屬ノ所領ニ屬スルヲ以テチヤラトン

人ハ例年之ニ收税スルト云フ

此支山リル山脈ヲ東南ニ越ニレハ荒漠タル高

日本統治以前期の台湾を知る貴重な記録

ル・ジャンドル

台湾紀行

我部政男 [山梨学院大学教授]

栗原 純 [東京女子大学教授]

編

原題「李氏台湾紀行」全11巻

底本 国立公文書館所蔵本

全四巻 [四六判・上製クロス装]

第一巻(第1回〜第7回収録) 402頁

第二巻(第8回〜第10回収録) 416頁

第三巻(第11回〜第22回収録) 448頁

第四巻(第22回〜第27回収録) 410頁

▼解説は第四巻の巻末に入ります

[定価]

本体60,000円+税(分売不可)

ISBN4-89774-240-5 C3030

台湾に関する書籍のご案内 ☆は未刊です

最新刊!

日本統治期台湾文学 日本人作家作品集

中島利郎・河原功編・解説/西川満、濱田隼雄、坂口禎子、中山侑、川合三良の代表作を編集復刻。別巻では佐藤春夫他11人の内地作家の作品を収録。植民地台湾文学、近代日本文学の空白をうめる初の本格的作品集である。全5巻・別巻1/58,000円

周金波日本語作品集

中島利郎・黄英哲編/日本統治期台湾文学を代表する周の日本語作品集。台湾文学研究の必読書/5,000円

『台湾時報』総目録

中島利郎編/台湾植民地研究に必須の工具書/全1巻/18,000円

『台湾警察協会雑誌』『台湾警察時報』総目録

中島利郎・林原文子編/日本統治期の台湾警察を知るための貴重な機関誌の総目録/18,000円

台湾大年表・台湾日誌

河原功解説/日本統治下台湾五十年の動向を伝えた唯一の年表・日誌/全2巻/32,000円

台湾近現代史研究 [創刊号↓第6号]

台湾近現代史研究会編/台湾近現代史に関する日本で唯一の研究誌の合本版/全2巻/29,000円

☆改訂増補 台湾六法

台湾日日新報社編/日本統治期台湾の特殊な法制体系を知る資料。原本は日本で殆ど見ることができない。昭和九年発行/全1巻/予価50,000円

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

お取り扱い